

「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能

著者	天野 みどり
雑誌名	日本語科学
巻	3
ページ	67-85
発行年	1998-04
URL	http://doi.org/10.15084/00001989

「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能

天野 みどり

(和光大学)

キーワード

前提, 焦点, 名詞述語文, 主題, 「は」と「が」

要 旨

名詞述語文を考察対象とし、「前提・焦点」構造という観点から、「は」と「が」の機能を考察する。「が」名詞述語文は、従来、「が」の前に焦点句があるタイプのみが取りあげられることが多かったが、「が」の後に焦点句があるタイプ、「が」の用いられた文全体が焦点句であるタイプも存在することを主張し、それらに共通する「が」固有の機能は、主題表示機能・焦点表示機能ではなく、格表示機能のみであることを述べる。「は」は主題表示機能を持つため、「は」文は〈主題, 前提の解釈をその文のみで行うことが可能である〉文として、「が」は主題表示機能を持たず、「が」文は〈主題, 前提の解釈を先行文脈や状況に依存して行う〉文として理解される。

0. はじめに

日本語の助詞「は」と「が」の機能の違いは従来様々に論じられてきたが、

- ① 「は」は主題を表示するが「が」は表示しない
- ② 「が」は格を表示するが「は」は表示しない

という機能の違いは、拠って立つ理論の異なりはあるものの、概ね共通に認められているものと思われる。ここから「は」と「が」は語用論と統語論という異なるレベルで説明されるべき機能を持つのであり、表面的な類似のみをとりたててこの二つの助詞を同列に扱うべきではないこと、本質的な異なりを追究するためには、主題を表す助詞「は」と、格を表す助詞「が・を・に…」というセットで考察すべきであることといった研究上の問題も論じられている(柴谷(1990) pp.282-288)。

他方、大筋での機能の異なりは認めながら、さらに、「が」の特殊性が強調される場合がある。すなわち、「が」は格を表示する機能だけではなく、いわゆる「総記か中立叙述か」といった意味を表示する機能があるという主張である。この後者の機能を「とりたて」助詞の体系に位置づける論もあり、その場合の「が」の機能は、「は」と同列のレベルで説明されることになる(野田(1995), 野田(1996) pp.276-277)。

「は」と「が」の機能の違いはどのようなものであり、そのそれぞれがどのようなレベルで働くと考えるのが妥当なのか。本稿は、名詞述語文に用いられる「は」と「が」の機能の違いを、「前提・焦点」構造という側面から再考するものである。

1. 情報構造からみた「は」と「が」の機能

「は」と「が」の違いを説明する場合に、「は」は旧情報（あるいは既知情報）、「が」は新情報（あるいは未知情報）を表示するといわれることが多い¹。しかし、西山・上林(1985)や堀口(1995)が指摘しているように、この情報の新・旧（未知・既知）という概念は、何をもってそれとするかが不明瞭である。また、例えば、旧情報を聞き手が知っている情報、あるいは、文脈上既出の情報と規定し、その規定から旧情報に該当する要素が仮に判定できたとしても、その該当要素は名詞述語文の「は」の前だけではなく、「が」の前にも現れ、「は」と「が」の違いを説明する概念として適さない。

- (1) a 祐二と弘子と恵子のうち、誰が発表者ですか？
b 弘子が発表者です。

(1) b の場合、「弘子」は先行文中に既出であるにも関わらず、「は」ではなく「が」でマークされており、単に要素が既出であるかどうかでは新旧の概念規定が不十分であることを示している。そもそも、情報上、新であったり旧であったりするの「は」「が」に前置する項目ではなくて、命題であるという指摘もなされている。

そのため、本稿では情報の「新・旧／未知・既知」の概念ではなく、「前提・焦点」という概念を次のように規定して用いることにする。

- (2) ある文、例えば、「AがBだ」文や「AはBだ」文の解釈に際して、聞き手に了解されていると仮定された、変項Xを含む命題〈AガXダ〉または〈XガBダ〉が「前提」であり、そのXと項がイコールで結ばれる命題〈X=B〉または〈X=A〉が「焦点」である。

ある文において、前提を構成する要素を「前提句」、焦点を構成する要素を「焦点句」と呼ぶ。

例えば(1) b では、〈Xガ発表者ダ〉が前提であり、〈X=弘子〉が焦点である。ここで用いる「前提」とは、ある発話に先立って聞き手の念頭に存在する命題であり、実際の談話進行上、〈次の発話で明らかにされるのは何か〉を表す、いわば、「問い」に相当するものである。（ただし、ここで言う「問い」とは、例えば「誰が発表者ですか」などの実際の言語形式そのものではない。）そして、「焦点」はその「問い」に対する「答え」に相当する命題である。単に強調されている部分とか重要である部分、あるいは絞り込まれている部分ということではない。

また、この「前提・焦点」という概念は、既に言語化されているかどうかということとは無関係である。

- (3) a 祐二と弘子と恵子のうち、誰が発表者ですか。
b 弘子が発表者です。
- (4) a どの人が指揮者ですか。
b グラスを持って立っている人が指揮者です。
- (5) a 山田さんにきつく言われてがっかりしたよ。
b 何でも反対するのが山田さんだ。がっかりすることなんかないよ。

上のb文はいずれも「が」の名詞述語文であり、それぞれの発話に先立つ前提の想定される例であるが、その前提は(3)(4)のaのように先行文脈に明示的であることもあれば、(5)のように明示的でないこともある((5)bは、例えば、〈山田さんがX(な人)ダ〉という前提が先立つと想定される)。「答え」も、(3)の下線部のように先行の発話に既に出現しているものの中から選択されたものの場合もあれば、(4)(5)の下線部のように、初めて言及されるものの場合もある。

近年、「は」と「が」の分析に際し、聞き手の認知状態を問題にした「活性・非活性」という術語が用いられることがある。先行文脈中に既出の事柄は聞き手の認知状態として「活性化」されているものとする、上のb文のように、「が」名詞述語文において「答え」を構成する項は「活性」「非活性」の両様があることになる。このように、情報上の「問い」「答え」を問題にする「前提・焦点」という概念と、発話者の認知的な状態を問題にする「活性・非活性」という概念とは独立した異なる概念である。旧来の、情報の「新・旧(未知・既知)」という概念は、この両者を未分化に含むため、「は」と「が」の分析のための説明概念として不適切なのである。

この「前提・焦点」という概念は、「が」名詞述語文の記述だけではなく、「は」名詞述語文の記述にも適用される。西山(1985,1990)・上林(1988)・熊本(1989,1992)は、「は」名詞述語文を複数の種類に分類するが、それは、当該文を構成する名詞句の指示性を究明する立場からである。例えば上林(1988)は、「は」名詞述語文を次の二種に分ける。

(6) 措定文 「AはBだ」 A…指示名詞句 B…叙述名詞句

倒置指定文 「AはBだ」 A…指示名詞句または叙述名詞句 B…指示名詞句

この二種を本稿の用いる「前提・焦点」構造の観点から記述するならば、措定文「太郎は学生だ」は〈太郎はどういう人物かというと学生だ〉の意味、倒置指定文「発表者は弘子だ」は〈発表者は誰かという弘子だ〉の意味であり、いずれも「は」に前置する名詞句が前提句、後置する名詞句が焦点句ということになる。同様に、西山(1985,1990)・熊本(1989,1992)は、「が」名詞述語文をその名詞句の指示性に応じて複数の種類に分けているが、そこで論じられている「が」名詞述語文は、「前提・焦点」の概念からは、いずれも「が」に前置する名詞句が焦点句、後置する名詞句が前提句と一括されることになる(天野(1995a) pp.3-8)。

他にも名詞述語文の分類は様々な立場からなされているが²、本稿は「は」名詞述語文と「が」名詞述語文の分類・整理そのものにその目的があるわけではないので、「前提・焦点」構造に観点を絞って「は」と「が」の機能の異なりを考察することにする。これは、異なる複数の説明概念を持ち込むことによって、理論的には無限の、しかも恣意的な分類に陥ることを回避するためということもあるが、さらに、これまでの名詞述語文研究の多くが、「前提・焦点」概念を用いて言い換えるならば、「は」は前提句をマークし、「が」は焦点句をマークするという説明に収斂し、本稿の筆者はまさにその収斂に疑義を抱くからである。

2. 「が」名詞述語文は「～が」が焦点句に限られるか

先にふれた上林(1988)・西山(1985,1990)・熊本(1989,1992)が、すべての「が」名詞述語文を「焦点句+『が』+前提句」とするように、従来の名詞述語文研究のほとんどが、その「が」を焦点

マーカ―として捉えている。中でも久野(1973)の「総記」「中立叙述」という概念による「が」の記述は、学界にかなりな影響を与えていると思われる。久野(1973)では、述部が動作・存在・一時的な状態を表す場合ならば、「が」は中立叙述の解釈(例えば以下の例(7))も総記の解釈(例(8))も可能だが、述部が恒常的状态・習慣的動作を表す場合は「総記」の解釈しか受け得ないと述べた(例(9)(10))。(例(7)~(10)は久野(1973)より引用)

(7) 太郎が死んだ。(中立叙述)

(8) 誰が死んだか。太郎が死んだ。(総記)

(9) *猿が人間の先祖です。(中立叙述)

(10) 何が人間の先祖ですか。猿が人間の先祖です。(総記)

つまり、久野(1973)は、恒常的状态を表す名詞述語文では、「が」はその前置要素が焦点句であることを示す、焦点マーカ―としての機能のみを持つという記述をしていることになる³。

しかし、名詞述語文の場合にも、「～が」が焦点句ではないものがある。例えば、仁田(1986)や新屋(1994)は次のようないわゆる眼前描写文の「が」名詞述語文の存在を指摘している。

(11) あっ、家がドーム型だ！(新屋(1994)より引用)

これは、「～が」の部分⁴が焦点句なのではなく、新屋(1994)の述べるように、文全体が焦点句であると考えられるものである。文全体が焦点句となるものには、こうした「眼前描写文」以外にも、次の下線文のようなものがある。

(12) 日本チームの負けは濃厚だ。主力選手がベンチウォーマーだ。

さらに、次の(13)の下線文のように、「が」の後方が焦点句となる場合もある⁴。

(13) 丈夫な品種がたくさんある。特におすすめなのがこれだ。

これらの例文の「が」に前置する名詞句「家」「主力選手」「特におすすめなの」は、「問い」に対する「答え」を示しているわけではない。(11)(12)は、後述するように、文全体が「答え」となっているので「全体焦点文」、(13)は、「が」のむしろ後方が「答え」を示しているので「後項焦点文」と呼ぶことにする。また、従来から指摘されていた「が」の前が焦点句である文を「前項焦点文」と呼ぶ。「が」名詞述語文には、「～が」が焦点句である前項焦点文の他に、「～が」が焦点句ではない後項焦点文・全体焦点文があることになる。

3. 「～が」が非焦点である文の位置づけ

「が」名詞述語文にも「～が」が焦点句ではない文がある。これを、上述のように「前提・焦点」構造の観点から細かく、①眼前描写の全体焦点文(例11)、②非眼前描写の全体焦点文(例12)、③後項焦点文(例13)の三タイプに分けるのは、「は」名詞述語文を後項焦点の文として位置づけるのと観点を等しくするためである。

新屋(1994)はこの三タイプをひとまとまりに中立叙述文として位置づけている。

(14) お正月に欠かせないのがかずのこです。(「お正月に欠かせないもの」が何かを述べている状況で)

(15) 上司があいつですよ。やる気が出ませんよ、まったく。

(16) あっ、家がドーム型だ!

(14)~(16)は新屋(1994)から引用。ただし状況説明は天野の付加)

本稿の立場では、(14)は後項焦点文、(15)は眼前描写ではない全体焦点文、(16)は眼前描写の全体焦点文である。中立叙述文の規定を〈「～が」が非焦点の文〉とするならば、これらをすべて中立叙述文としてひとまとまりに位置づけることは妥当である⁵。

しかし、この位置づけの妥当性は、中立叙述文を〈「～が」が非焦点の文〉と捉える限りにおいて認められるものであって、中立叙述文を〈文全体で焦点を表す文〉と規定する場合には、これらすべてを一括して中立叙述文とするわけにはいかない。新屋(1994)は、このいずれれもが「前提命題と焦点に分化しない」「まるごと焦点」となる文とし、Fukuda(1995)は、(13)(14)のような文は前提と焦点の明確な区別がなく、文全体で Brand-New であるかのように表現したものであるとする。つまりいずれも全体が焦点句だとする考え方であるが、その場合に、その証拠となるような現象が示されているわけではない。

他方、以下のように、「～が」が非焦点である文を「前提・焦点」構造の違いによって三タイプに分けるべき現象の違いを指摘することができる。

まず、(13)(14)が「が」の後に焦点句を持つとする根拠は、天野(1995a)によって、

①「例えば」が共起し得る場合、その例として述べられている要素が「が」に前置(前項焦点文)せずに、後置する(後項焦点文)。

②「何だと思う?」という句を「が」の後に挿入できる(後項焦点文)。(前項焦点文はできない)という二点が挙げられている。また、砂川(1996b)では、

③「なんと・ほかでもない」といった句が「が」の後置要素を修飾し得る。ということの後項焦点文の特徴としている。

このうち、とりわけ②は、「前提・焦点」構造の考察の上で重要である。焦点句とは、その表す指示対象が文脈あるいは状況・常識などの様々なレベルで既有的知識であろうとなかろうと、その文脈で「問い」となっていることに対する「答え」を表示したものである。もしも「が」の後置要素が前提句であるならば、その前に「何だと思う?」といった句を差し挟めるはずはない。それが「答え」を示す、焦点句であるからこそ、前項焦点文とは異なって、「何だと思う?」が挿入できるのである。

さらに、この種の文が前項焦点文とは異なることを示す第四の現象として、次のものを付け加えることができる。坂原(1990)は、前項焦点文が「AがBのCだ」という形式の場合、後項名詞句「BのC」の「B」を「は」でマークした「BはAがCだ」の形式とほぼ同じ意味を表すことを指摘している。

(17) a T社の社長はどの人かわかる?

b 赤いネクタイをしているのがT社の社長ですよ。

(18) a T社の社長はどの人かわかる?

b T社は、赤いネクタイをしているのが、社長ですよ。

(17) b の「T社の社長」は前提句である。この前提句の中から、その一部をなす「T社」だけ

を分離して「は」でマークしたのが(18) bの「BはAがCだ」文である。「～は」は先に述べたように前提句を形成する。従って、この「BはAがCだ」文は、前提句がBとCに分離して示されている文であり、「Aが(=焦点句) BのCだ(=前提句)」文と、何が焦点で何が前提であるかという点に違いがない。

他方、次の「AがBのCだ」文の場合には、「B」を「は」でマークした「BはAがCだ」文とほぼ同じ意味を表すとは言えない。

(19) たくさんの客が来ています。特に興味深いのがT社の社長です。

(20) たくさんの客が来ています。T社は、特に興味深いのが社長です。

(19)の意味は、「たくさんの客の中で特に興味深い人を探すと、それはT社の社長だ」という意味であるのに、(20)は、「T社の関係者の中から特に興味深い人を探すと、それは社長だ」という意味である。(19)の「AがBのCだ」文は後項焦点文であり、「B」(T社)が焦点の一部であるのに対し、(20)の「BはAのCだ」では「B」(T社)が「は」でマークされ前提句として提示されているため、両文の意味が異なるのである。

では、以上の四点から後項に焦点があると判断される文と、全体焦点文とはどのように異なるのだろうか。

(21)の下線文は、その文全体で〈日本チームの負けが濃厚なのはなぜか〉という「問い」に対する「答え」の意味を表している。

(21) 日本チームの負けは濃厚だ。主力選手がベンチウォーマーだ。

この文が前項焦点文とも後項焦点文とも異なることは、「例えば」が共起した場合の解釈の違いに示される。

(22) 日本チームの負けは濃厚だ。主力選手が例えばベンチウォーマーである。それに、対戦チームが、昨日の試合で大いに士気をあげている。

(22)の下線文の場合、その「例えば」の位置に関わらず、〈日本チームの負けが濃厚なのはなぜか〉ということの一例として、〈主力選手がベンチウォーマーであること〉という文全体で表される内容が挙げられている。次の(23)の後項焦点文の場合のように「主力選手」に関する様々な事例(遠征中だ)とか(謹慎中だ)とかの中から一つの例として〈ベンチウォーマーだ〉という例を表示しているわけではない。

(23) 日本チームの選手たちはどういう状態か。主力選手が例えばベンチウォーマーである。

また、遠征中の者もいる。謹慎中の者もいる。他の選手たちも練習不足である。

また、同じ全体焦点文とは言え、非眼前描写の全体焦点文(21)と眼前描写の全体焦点文(24)は異なるレベルの「前提・焦点」構造と考えられる。

(24) あっ。家がドーム型だ。

(21)の下線文はその前提命題を個々の先行文脈に求めるタイプだが、(24)は先行文脈が必要ないものであり、(21)と同種の前提命題はないと言わなければならない。しかし、前提命題のない焦点は定義上ありえない。では、どのようなものが前提命題として考えられるだろうか。この場合に考えられるのは「今、ここで私が知覚して発話したいことはXである」といったものであろう。

これは、先に述べた後項焦点文や非眼前描写の全体焦点文の前提命題が当該の個々の文脈に解釈を依存するのとは明らかに異なるレベル（発話のレベル）のものであり、区別すべきである⁶。

4. 「は」と「が」の違い

4.1. 文の依存度の違い

「は」名詞述語文は後項焦点文であり、「が」名詞述語文には前項・後項・全体焦点文（眼前描写の全体焦点文・非眼前描写の全体焦点文）がある。この、「前提・焦点」構造の観点から見た用法の広狭の差こそ、「は」と「が」の機能の違いを示すものである。つまり、「は」は、その前に前提句、後に焦点句があることを示すのに対して、「が」は、それ自体では、文のどの部分に前提句、焦点句があるかは示さない。「が」名詞述語文の場合、「前提・焦点」の解釈は先行文脈・状況に応じて決定されるのである。よって、名詞述語文における「は」と「が」を、同一レベルで対応させて捉えるのは誤っている。

この節では、名詞述語文における「は」と「が」のレベルの異なりを、その前提句の違いに注目して考察する。

天野(1996)では、実際に用いられた後項焦点「が」文・後項焦点「は」文の例を調査し、表1に示すような傾向性の違いを明らかにした。そして、その傾向性の違いが、「は」と「が」の機能の違いを反映しているとした。表の右欄には①～⑦の特徴を持つ例を後項焦点「が」文／後項焦点「は」文の順に簡単に示してある。（太字の部分が①～⑦の特徴。なお、①～⑦の特徴のうち、③～⑥は他の特徴と重複しないが、①②⑦は重複の可能性があるものである。）

表1 後項焦点「が」文・後項焦点「は」文における①～⑦の特徴の出現率

特 徴	文の種類	後項焦点 「が」文	後項焦点 「は」文	例
①前提句が同一指示的		3%	14%	山彦が現れた。 <u>その山彦が</u> ／は中村の役だ。
②焦点候補が明示的		22	3	この中で一番 <u>が</u> ／はDさんだ。
③前提句が特立的意味		18	9	特に有名な <u>のが</u> ／はこの酒だ。
④前提句が数的意味		10	5	大半 <u>が</u> ／は学生だ。
⑤前提句が列举の意味		5	4	一番目 <u>が</u> ／は学長の挨拶だ。
⑥前提句が相対の意味		5	2	下の子 <u>が</u> ／は小学生だ。
⑦名詞文が並立		10	3	右手 <u>が</u> ／は教室。左奥 <u>が</u> ／はサロン。

※調査は雑誌・単行本から採集した後項焦点「が」文103例、後項焦点「は」文269例についてのもの。

※数字は、①～⑦の特徴を持つ後項焦点「が」文／後項焦点「は」文が、後項焦点「が」文／後項焦点「は」

文全体の中で占める割合（数字は百分率。小数点第一位以下は四捨五入。例えば、①の特徴をもつ後項焦点「が」文は3例。よって、 $3/103 \times 100 = 2.91\dots$ 、小数点第一位以下を四捨五入して3。）

この傾向性の違いをまとめると以下のようなになる。

(25) 後項焦点「が」文は、

- ・ある限定された候補の中から焦点句を導き出すことが多い。(特徴②より)
- ・他の前提句の存在を暗示することが多い。(特徴③～⑦より)
- ・先行文脈中に明示的な前提句を単に繰り返すことはない。(特徴①より)
- ・先行文脈中の前提句を下位の意味に言い換えて提示することが多い。(特徴③～⑦より)

これを「メダリストは誰ですか。この中で金メダリストが原田で、銅メダリストが岡崎です。」の文で説明してみよう。後項焦点「が」文は、「この中で」などの限定された候補を明示することが多く、また、その前提句は、「金メダリスト」に対して「銅メダリスト」というように、同一の上位語のもとにある他の前提句の存在を(暗に)示すことが多い。そして、先行文脈中の「メダリスト」を単に繰り返した「メダリストが原田だ」は不自然であり、意味的に上位の「メダリスト」を下位の「金メダリスト」に言い換えて提示することが多いということである。

これに対して、後項焦点「は」文は以下のようにまとめられる。

(26) 後項焦点「は」文は、

- ・焦点候補が特に限定されていない。(特徴②より)
- ・先行文脈中の前提句を単に繰り返すことも、下位の意味の前提句に言い換えることも、先行文脈中にない新たな前提句を提示することもある。(特徴①より)
- ・その前提句が他の前提句の存在を暗示することもしないこともある。(特徴③～⑦より)

後項焦点「は」文の場合には、「この中で」のような限定が少なく、また、例えば「金メダリストは誰ですか。金メダリストは原田です。」のように先行文脈中の前提名詞句を繰り返すこともあるし、「ところで金メダリストは原田だったね。」のように先行文脈中にない前提名詞句を提示することもある。さらに、その場合に、特に対比的に他の例えば「銅メダリスト」を暗示するわけではない場合があるということである。

さて、他の前提句の存在を暗示するような前提句を「対比前提句」と呼ぶことにすると、ここで重要なのは、後項焦点「が」文の前提句は、対比前提句に限られるということである。と同時に、その前提句は、先行文脈で明示された前提句を意味的に下位化したものであり、上位の意味の前提句を先行文脈中に求めるといふ意味において、先行文脈依存的ということである。

(27) 昨日の競技会で、入賞者は誰？ 二位が中野さんです。四位が高野さんです。

(28) …夫婦二人と三人の子供です。で、家族五人です。(で、あの一、お子さん達は)

え、(何年生ですか) そうですね、上二人が一、ちょっと大きくて、高三と、あと19歳の子の女の子です(はい)で、あの、相談にのっていただく子が小学五年生の男の子です。

(()内は相手の発話)

(27)は、「入賞者」がその下位の意味の「二位」「四位」で提示されている例であり、(28)は、「お子さん達」が「上二人」と「相談にのっていただく子」に下位化されて示されている例である。

次の後項焦点文の例(29)は、(27)(28)のように対比前提句の「～が」が並立していないが、「特に有名なの」という言い方に、「特に有名とまでは言えないもの」の存在が暗示されるし、「特に有名なの」と「特に有名とまでは言えないもの」とを合わせた上位の前提句が先行文脈にあることが想定される⁷。

(29) この「ホイリゲ」「新酒のワインを飲ませてくれる居酒屋」という意味でも使われ、ウィーンの森にはこうした居酒屋が並ぶ村が、あちこちに点在しています。特に有名なのがリンツィング、ヌスドルフ、ジーヴェリングといった村。入り口にぶらさがったモミや松の枝は葡萄の収穫と店の営業中を知らせる目印で、…

次の(30)は、久野(1973)において、名詞述語文であっても「が」が総記の意味を表さない、例外とされたものである。この文も本稿の立場では後項焦点の「が」文の例であり、「ほとんどの学生」が「それ以外の学生」の存在を暗示し、さらに、その二つに下位分類する基となる、上位の前提句が、先行文脈中に存在すると想定されるものである。

(30) ほとんどの学生が金持ちの息子です。(久野(1973)の掲載例)

他方、後項焦点「は」文の前提句は、対比前提句である場合も(例(31))そうでない場合も(例(32)(33))あり、上位の意味の前提句を、あるいは、同じ意味の前提句を、先行文脈中に求めるといった意味において、先行文脈依存的である場合も(例(31)(32))、そうではなく、先行文脈にはない、新たな前提句を提示する場合も(例(33))あるということである。

(31) 昨日の競技会で、入賞者は誰? 二位は中野さんです。四位は高野さんです。

(32) 昨日の競技会で、入賞者は誰? 入賞者は中野さんです。

(33) ところで、昨日の競技会で、入賞者は中野さんでした。

この、後項焦点の「は」文との比較によって得られた後項焦点の「が」文の特徴は、他の「前提・焦点」構造の「が」文にも共通する点がある。前項焦点「が」文の場合、対比前提句の場合も(例(34))そうでない場合も(例(35))あるが、いずれにせよその前提句の解釈は、先行文脈依存的である。

(34) 昨日の競技会で、入賞者は誰? 中野さんが二位です。高野さんが四位です。

(35) 昨日の競技会で、入賞者は誰? 中野さんが入賞者です。

つまり、前項焦点にしる後項焦点にしる「が」を用いた文の、「は」文との決定的な違いは、「は」文が、全く他の文に依存することなく、その文のみで独立に新たな前提命題の提示が可能なのに対し、「が」文は、その文内に提示される前提句の解釈に際し、参照すべき前提命題の提示が既に先行文脈上行われていると想定されるということである。

これは、非眼前描写の全体焦点の「が」文についても当てはまることである。

(36) 日本チームの負けは濃厚だ。主力選手がベンチウォーマーである。それに、対戦チームが、昨日の試合で大いに士気をあげている。

この場合、下線文を焦点句とする前提命題〈日本チームの負けが濃厚なの(X(のため)ダ)〉の解釈は、その先行文脈中に求められ、下線文は先行文脈と独立には決して存在し得ない文である。

また、眼前描写の全体焦点の「が」文の場合は、先行する文脈の必要がなく、他の文に前提命

題の解釈を依存するとは言えない。しかし、当該文の焦点解釈に必要な前提命題が、「は」文のように、その文内に新たに提示されるということではなく、当該の文以外に依存する（状況に依存すると考えておく）という点では、他の「が」文と同じである。

4.2. 主題の有無

丹羽(1988)では、「前提・焦点」構造における「前提」と「主題・解説」構造における「主題」とを別概念としている。(なお、「解説」とは、「主題」について述べたてている部分ということである。)本稿もこの立場に立ち、「主題」を「当該の談話でそれについて解説される主要な課題」と考えることにする⁸。つまり、前提句がみな主題に相当するのではなく、何度も反復されたり下位に言い換えられたりする場合には、その最初に提示された前提句のみが「主題」として効力を持ち続けていると考える。この概念を用いて4.1.で述べたことを言い換えるならば、「は」文は、その文内で「主題」を表し得るが、「が」文は、前項・後項・全体のいずれに焦点がこようが、また、眼前描写文であろうが非眼前描写文であろうが、その文内で「主題」を表すことはないということになる。すなわち、「は」文は文内に主題を提示し、一文に「主題・解説」部分を持ち得るが、「が」文は主題を他に依存し、文脈・状況と連合することによって「主題・解説」構造を完成する。

(37) 主題	解説	
① 「 二位 は	田中だ。」	後項焦点「は」文
② 「 入賞者 は誰？」	「 二位 が田中だ。」	後項焦点「が」文
③ 「 入賞者 は誰？」	「田中が 二位 だ。」	前項焦点「が」文
④ 「 このチームは弱すぎる 」	「田中がやっと10位だ。」	非眼前描写の全体焦点「が」文
⑤ (今発話したいこと は何?)	「家がドーム型だ。」	眼前描写の全体焦点「が」文
 = 前提句 _____ = 主題を構成する句 ゴシック体 = 焦点句 ⁹		

重見(1992)は前項焦点「が」文を主題が転位したり倒置したものと捉えず¹⁰、「～は」の省略と捉える。「が」文がその文に言語化されている以外の主題と結びつく文であるという捉え方は本稿と同じである。しかし、省略とは、本来あるべきものが略されているという概念であり、重見(1992)の立場では「が」文を本来あるべき一文の資格を得ていないものと位置づけてしまうことになる。

従来、前項焦点「が」文は「据わりが悪い」「落ち着きが悪い」と言われ、文法性そのものが疑われる向きがあった。例えば、青木(1993)では、「本来は『は』であるべきものの、答えを強調するために倒逆的に述べたもの」であり、「名詞述語文として本来的でない」と述べられている。しかし、こうした判断は、文を文脈から切り離して考察する文法研究のありかたによるものである。「は」文が一文内に「主題・解説」構造を持つためにそれだけで意味的に安定するのに対し、「が」文は他に主題を依存するので、その文を独自に観察した場合、意味的に不安定な印象を与えるにすぎない。先行文脈に意味的に依存することと、文法的な適格性に欠けているために落ち着きが悪いことは同じではない。

実際の談話を構成する文は、意味的に他からの独立度の高い文から低い文まで様々ある。それは実際の機能上必要な傾斜であると考えられる。独立度が低いということは、文としての機能が

劣っているとか、間違っている、ということと同じではなく、相応の機能を果たしていると考えなければならない。「は」名詞述語文と「が」名詞述語文も、それぞれ異なる文としての機能を果たすと考える。すなわち、連続した発話の中で「は」文は〈主題、前提の解釈を、その文独立に行うことが可能である〉文として、「が」文は〈主題、前提の解釈を、先行文脈や状況に依存して行う〉文として機能しているのである。

5. 「が」にとりたて機能はあるか

「は」と「が」の機能の異なりについて、北原(1981)は「は」は題述関係を構成するもの、「が」は論理関係を明示するものと述べ、また、吉本(1982)は、「は」は主題のマーカであり、談話文法で扱われるべき対象、「が」は要素の文中における関係を明示するマーカであり、統辞論の範疇の対象と説明している。本稿もこれらと立場を同じくし、「が」は非主題の関係表示機能を持つものと考え、主題表示の「は」とはその機能のレベルが異なると考える。

これに対し、野田(1995,1996)は、「が」の一部を「は」とともに「とりたて助詞」とし、「は」と同じレベルで働くものとしている。すなわち、主題の「は」は「事態へのムードの階層」で働く「とりたて助詞」とし、「こっちのほうが好きいだ」の「が」を、対比の「は」と同様「肯定否定の階層」で働く「とりたて助詞」と位置づけている(中立叙述の「が」は「ヴォイスの階層」で働く格助詞としている)¹¹。

他の格助詞の「を」「に」などと区別して、「が」のみにとりたて機能を認める根拠として示されているのは、

①他の格助詞の場合、その前置要素が焦点句であることを示すのに特別な音調が必要であること¹²

②他の格助詞の場合、他の格をとりにたてることがないが、「が」の場合にはあることの二つである。

このうち、①の指摘は、本稿の「前提・焦点」概念からの分析に直接関わる指摘である。すなわち、「が」には他の格助詞とは異なりその前が焦点句であることを示す機能が固有にあるとし、その機能を「とりたて」と呼んでいるわけである。その根拠は例えば「何を買った？／靴を買った」という場合のように他の格助詞が焦点句を示すには、必ず特別な音調が加わるということである。しかし、この一般化は性急である。次の例文のa「～が」とb「～を」を比べた場合、その音調は変わらない。

(38) a 「どこが優勝した？」「ヤクルトスワローズが優勝した。」

b 「どこを応援した？」「ヤクルトスワローズを応援した。」

(39) a 「ジャイアンツが優勝したんだってね。」「違うよ、ヤクルトスワローズが優勝したんだよ。」

b 「ジャイアンツを応援したんだってね。」「違うよ、ヤクルトスワローズを応援したんだよ。」

むしろ、「～が」に対する「～を」にではなく、(38) a b の下線部に対する(39) a b の下線部に

特別な音調が加わっていることが観察される。特別な音調が必要かどうかは、焦点句をそれと対比される他の要素からどれだけ区別する必要がある文脈かどうかによって左右されるのであり、格助詞の種類によって左右されるのではない。焦点表示機能に加担する音調は、「が」も他の格助詞の場合も（さらには副詞などの場合も）同様に、随意的なものである。さらに言えば、この音調の機能は焦点表示にあるのではなく、より広範に対比表示にあり、対比焦点句ではなく対比前提句を表す「～は」や「～が」にも用いられるものである。

次に根拠の②は、「XがYがZ」型の文、例えば「太郎が子供がいる」という文において、「太郎が」は「太郎に子供がいる」の「太郎に」という他の格成分をとりたてているのに対し、助詞「を」や「に」にはこのような用法がないという主張である。ここで言われている「とりたて」の機能は、本稿の考察対象である「前提・焦点」概念とは直接的には関わらない。（「太郎が子供がいる」の「太郎が」が本稿で言う焦点句である場合も、非焦点句である場合もあることは石田(1995)、菊地(1996)で述べられている。）つまり、野田(1995,1996)の用いる「とりたて」の概念は、この部分で本稿の考察対象である焦点表示機能以上に広い可能性があるが、この部分についても「が」固有に「とりたて」機能が認められるかどうかの検討をしておくことにする。

天野(1990)では、「太郎に子供がいる」に対応する「太郎が子供がいる」のような「XがYがZ」文の成立には語用論的な制限があり、「が」に他の格成分をとりたてる機能があるのではなく、「YがZ」部分が語用論的に一つの属性述語相当に解釈され、それが「Xが」という主格と結びつく解釈がされる場合に許容可能となるとしている。つまり、意味的に「Xが」が「Xに」などの他の格助詞と置換可能と見える場合も、「が」が用いられている場合には、その「が」は主格の関係表示を行っているのである。他の「を」や「に」といった格助詞にこの用法がないのは、それが主格を表さないためである¹³。

このように、格表示機能をもつ「が」とは別にとりたて機能をもつ「が」があるのではない¹⁴。「が」の果たす焦点表示機能は、北原(1981)・吉本(1982)・堀口(1995)が言うように、「が」固有の機能ではないのである¹⁵。

6. おわりに

本稿では情報構造の観点から名詞述語文の「は」と「が」の機能を考察した。これまで、術語こそ異なるものの、名詞述語文の「は」と「が」は、「『は』はその前が前提句、その後が焦点句」であり「『が』はその前が焦点句、その後が前提句」であるといったような、同一平面的な対称関係を旨とした記述のなされることが圧倒的に多かった。しかし、本論中に紹介したように、近年、「が」名詞述語文には様々なタイプのあることが指摘され、偏った言語事実に基づいた旧来の記述は再考を迫られる期にきていたと思われる。本稿では、近年指摘され始めた言語事実を単に周辺の「が」文として追いやるのではなく、それらを含めて「は」と「が」の機能を再考したことになる。

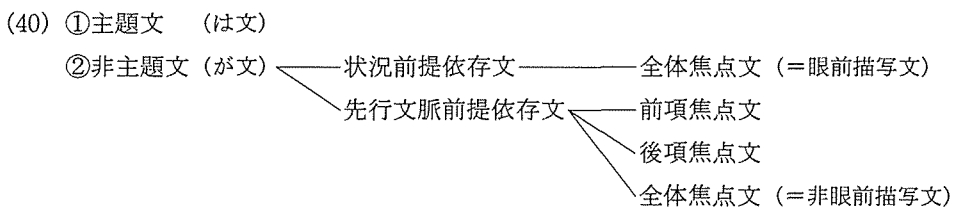
すなわち、「は」文は後項焦点文であるのに対し、「が」文には、前項焦点文・後項焦点文・全体焦点文があるという言語事実をふまえ、「は」はその前が前提句、その後が焦点句であることを

示すが、「が」には、それと対応するような、前提句・焦点句の位置を示す機能はないと考える。

また、本稿では、「は」文と「が」文の前提句の違いに注目し、「は」は主題表示機能を持つが、「が」は持たないということを明らかにした。実際の文連鎖の理解の過程では、聞き手は様々な情報の関連づけを行っているものと考えられる。その過程において働く文の機能ということでは、ならば、「は」文は、「は」が主題表示機能を持つために、〈主題、前提の解釈を、その文だけで独立に行うことが可能である〉文として、「が」は主題表示機能を持たないことから、間接的に「が」文は〈主題、前提の解釈を、先行文脈や状況に依存して行わなければならない〉文として機能する。

つまり、「が」には、固有の機能として焦点表示機能も主題表示機能もなく、一義的には格表示機能があるのみであり、「は」とはその機能のレベルが異なると考えなければならないのである。「が」が焦点表示機能（あるいはいわゆる「とりたて」の機能）を果たすと見える場合も、それは、格表示機能に付随してのことである。

本稿で考察した情報構造の観点から「は」名詞述語文と「が」名詞述語文を分類して示すと以下のようになる¹⁶。



本稿は名詞述語文のみを考察の対象とし「は」と「が」の機能を述べたが、「が」以外の格成分や修飾成分の現れる動詞述語文、また、「は」以外の「も」「こそ」などの係助詞を考察範囲に入れることにより、単に「は」と「が」の違いの説明にとどまらない、「前提・焦点」構造の究明がなされなければならない。

注

- 1 松下(1928)、松村(1942)、チェイフ(1974)、大野(1978)、北原(1981)、青木(1992)など。
- 2 特に、「が」名詞述語文については、近年、詳細な分類・整理が行われている。砂川(1996a)は談話機能的観点からの分類である。また、砂川(1996b)は後項焦点の「は」名詞述語文と「が」名詞述語文の違いを「焦点提示機能」と「特立提示機能」というレベルの異なる二つの概念で説明している。菊地(1997b)は「が」名詞述語文を主な用法二種と、周辺的な用法三種に分け、詳述している。また、高橋(1996)では、「が」の措定文として一群の文を記述している。
- 3 久野(1973)だけでなく、名詞述語文における「が」が焦点句に付く用法のみであるという趣旨の説明はたびたび行われてきた。松下(1928)pp.772-781、同(1930)pp.336-343、松村(1942)pp.385-408、三上(1953)pp.40-50、北原(1981)pp.241-282、同(1984)pp.115-127、益岡(1987)p.23、p.36注6、坂原(1990)pp.29-66、宮地(1984)pp.179-182、青木(1992)p.121など。
- 4 後述するように、久野(1973)自身が「～が」が総記でない例について、「例外」として言及している。その例は本稿の立場から記述するならば後項焦点の「が」の文である。後項焦点の「が」

の文については、実際の言語資料に基づく報告が天野(1995a,1995b)でなされており、「例外」として無視できないほどのものであることが示されている。

5 これらの中立叙述文として位置づける立場には、他に野田(1996)がある。また、菊地(1997b)は本稿でいう後項焦点文を「非典型的〈中立叙述文〉」としている。菊地(1997b)は後項焦点文を、〈関心の対象〉に該当する答えを後半で与えるものとするが、その答えに「一種の前提性」があるとする点で本稿の見解と異なる。その根拠は、後項焦点文の場合、その焦点句で述べられるものが、①すでに話題になっているか、その場で話題にしてもおかしくないもの、②話題に未出のものをあたかも既出のように述べるもの、③明らかに未出だが、以下の話題の中心になることが予定されたものであるからとしている。このうち、菊地(1997b)の主張にとっては、未出ながらいわば「前提性」が認められるとする③が重要である。しかし、未出のものが焦点句に用いられた場合に、それ以上そのものについて言及しないということが起こりにくいというのは、運用上の(語用論的な)問題であって、前項焦点「が」文(例えば「一人の男がそこへ現れた」)であっても、後項焦点「は」文(例えば「そこへ現れたのは一人の男」)であっても同じであろう。さらに、この場合、前項焦点「が」文に比べて後項焦点「が」文(例えば「そこへ現れたのが一人の男」)の焦点句の方が後行の話題の中心となりやすいとするならば、それは語順の問題である。(実際、後項焦点「は」文にも同様の意味合いが感じられる。)従って、後項焦点「が」文の焦点句にのみ「一種の前提性」を認めるのは適切ではない。なお、菊地(1997b)は、後項焦点「が」文の焦点句に「一種の前提性」があるために、この文型に野田(1996)の指摘するような「注意を引きつける効果」や「おおげさに伝える色彩」が出るとしているが、後項焦点「が」文にはそうした効果・色彩の出ないものもある。(例えば「お子さんいくつ? / 今年上の子が高三で、下の子が中二よ。神経使いそうだね。)

6 このレベルの前提命題は、すべての発話に(従って前項・後項焦点文、非眼前描写の全体焦点文にも当該の個々の文脈に想定される前提命題とともに)想定されるものである。眼前描写の全体焦点文は、このレベルの前提命題しか想定できないということである。

7 参照すべき前提命題は、先行文脈中に様々な形で存在する。明らかに意味的に上位である名詞句が提示されていない場合もある。例えば次の文では、オリンピックの話題が先行文脈中にあるのみで、「メダル」という名詞句そのものは提示されていない。本稿の筆者は、後続の文が「が」文であることによって、むしろ逆に先行文脈中に参照すべき前提名詞句があるはずだという想定がなされ、可能な意味的結びつきの解釈が行われるのだと考える。

(i) 今回の冬季オリンピックでは、いい記録がいっぱい出たね。

金メダルが5個で、銀メダルが1個で、銅メダルが4個だ。

このような先行文脈との意味的な結びつきに関して、「カキ料理は広島が本場だ」型の文を対象に菊地(1997a)が詳述している。(p.93右～p.94左)

8 尾上(1995)は次の要件を備えたものを典型的な主題(題目)と規定している。

①一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある。

①a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。

①b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。

②その成分が、後続部分の説明対象になっている。

この①②の要件は後項焦点「が」文の前提句にもあてはまるように見える。他方、「その部分が全体の中から仕切り出されて」ということの具体的内容が後項焦点の「が」文にはない「は」文

の前提句の特徴を記しているようにも見える。

- 9 ①は、〈二位は誰かという、田中だ〉、②③は〈入賞者は二位が誰かという、田中だ〉、④は〈このチームが弱すぎるのはなぜかという、(主力の)田中がやっと10位(に入れるぐらい)だ(から)〉、⑤は〈今発話したいことは何かという、家がドーム型だ(ということだ)〉という意味である。
- 10 例えば、三尾(1948)が「転位文」、佐治(1973)が「転位陰題文」とするように、従来、前項焦点文を「は」文の倒逆と捉えることが多かった。
- 11 また、菊地(1996,1997b)では、「(解答提示)の「が」(本稿でいう焦点句を表す「が」)は「係助詞／取り立て助詞的」と述べられている。注14も参照のこと。
- 12 野田(1996)では「焦点句」ではなく、「排他」の用語。
- 13 菊地(1996)は様々なタイプの「XがYがZ」文の存在を示した上で、その成立条件を検討し、この文は「解答提示」(本稿の概念だと焦点句)「中立叙述」を表すために、「は」を「が」に変えたものであり、「XがYがZ」文固有の成立条件はなく、「XはYがZ」文の成立条件と、一般の文の「が」の使用条件を掛け合わせたものとして説明できるとする。しかし、それならば他の格成分を主題化した、例えば「山田先生は学生が招待した」は問題なく許容できるのに、「山田先生が学生が招待した」の許容度が落ちるのはなぜなのか、さらに「山田先生が多くの学生がよく話題にした」の方が同じ「XがYがZ」文であっても許容度が上がると思われるが、それはなぜなのかを説明できない。この許容度の違いはまさに、「XがYがZ」文が成立するためには、語用論的に、「X」が属性主、「YがZ」部がその性質を表す述部として解釈可能なことが必要なことを示していると考えられる。
- 14 菊地(1996)は「が」以外の格助詞にも焦点表示機能があるとした上で、「が」には格助詞性を欠いて「解答提示」(焦点表示)に徹した用法があり、他の格助詞に比べて「解答提示」用法の確立度が高いとする。その理由は、この用法の頻度が他の格助詞に比べて高いためであり、この用法の頻度が高いのは「が」が「主語の格助詞」だからとしている。本稿の筆者は、他の格成分をとりたてていると見える「XがYがZ」文についての議論で述べたように、「が」が格助詞性を欠いて焦点表示のみを行うとは考えないが、他の格助詞に比べて格関係表示とともに焦点表示を行う頻度は高く、それは、まさに「が」が主格表示機能を有する格助詞であり、格の中で主格が最も「際だち」性を持つことに基因すると予測している。この点に関しては実際の調査をふまえて今後論じたい。
- 15 Lambrecht (1994)は「項焦点」(argument-focus)、「述語焦点」(predicate-focus)、「文焦点」(sentence-focus)(順に本稿の考察対象である名詞述語文では「前提焦点」「後項焦点」「全体焦点」に相当する)の三類をたてているが、日本語の「が」文については、次の(i)と(ii)の二つのタイプ、すなわち、久野(1973)の「総記」文と「中立叙述」文のみを分析し、いずれにおいても「が」は非主題を示すものとしている。さらに、それはとりもなおさず、いずれも「が」の後方に焦点がないことを示すとし、日本語の「が」を「格」マーカーではなく、「焦点」マーカーと記述した方がよいと述べている。

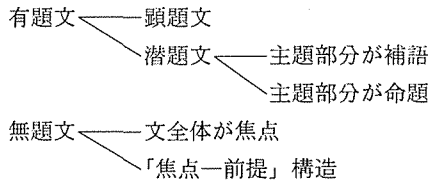
(i)「君のバイクが故障したって聞いたよ」「車が故障した(んだ)」〈項焦点〉

(ii)「何が起きたの?」「車が故障した(んだ)」〈文焦点〉(「(んだ)」は天野の補足)

Lambrecht (1994)のこの主張は、「～が」が非主題であればとりもなおさずその述語に焦点がないと結論づける点に誤りがある。「主題・解説」構造と「前提・焦点」構造は別物であり、「～が」が非主題であっても前提句、そしてその後部が焦点句となることがあり得る。もしも「が」が焦

点マーカ－と言うならば、それは「が」文のどこかに焦点がある、という意味しか持たないことになり、それは他の格成分や修飾成分でも同じことである。「が」のみを特別に扱って、格マーカ－ではなく焦点マーカ－であるとする理由はない。(p.223, p.355 注11)

16 丹羽 (1988) は次のような分類をしている。



本稿では、丹羽 (1988) の無題文の「文全体が焦点」である文の中に、他の文に主題を依存するのではない文 (眼前描写) と、依存する文 (非眼前描写) とがあり、また、「焦点—前提」構造の文だけでなく、「前提—焦点」構造の文もあるとしたことになる。

参考文献

- 青木 伶子 (1992) 『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
- 天野 みどり (1990) 「複主格文考」『日本語学』9:5, pp.27-42
- 天野 みどり (1995a) 「「が」による倒置指定文—「特におすすめなのがこれです」という文について—」『人文科学研究』第88輯, 新潟大学人文学部, 左 pp.1-21
- 天野 みどり (1995b) 「後項焦点の「AがBだ」文」『人文科学研究』第89輯, 新潟大学人文学部, 左 pp.1-24
- 天野 みどり (1996) 「後項焦点の名詞述語文—「は」と「が」の考察の基点—」『和光大学人文学部紀要』31, pp.1-10
- 石田 尊 (1995) 「中立叙述の多重主格構文」(国語学会秋季大会発表要旨集)
- 大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』岩波新書, pp.21-51
- 尾上 圭介 (1981) 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58:5
- 尾上 圭介 (1985) 「主語・主格・主題」『日本語学』4:10
- 尾上 圭介 (1995) 「「は」の意味分化の論理—題目提示と対比」『言語』28, pp.28-37
- 上林 洋二 (1988) 「措定文と指定文—ハとガの一面—」『文芸言語研究, 言語篇』14, 筑波大学文芸言語学系, pp.57-74
- 北原 保雄 (1981) 『日本語の文法』中央公論社
- 北原 保雄 (1984) 「総記と中立叙述—主格助詞「が」の二つの用法—」『日本語文法の焦点』教育出版, pp.115-127
- 菊地 康人 (1996) 「「XがYがZ」文の整理—「XはYがZ」との関連から—」『東京大学留学生センター紀要』6, pp.1-46
- 菊地 康人 (1997a) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」『広島大学日本語教育学科紀要』7, pp.89-107
- 菊地 康人 (1997b) 「「が」の用法の概観」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房, 左pp.101-123
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店, pp.27-47, pp.158-170, pp.207-218
- 熊本 千明 (1989) 「指定と同定—「…のが…だ」の解釈をめぐって」『大江三郎先生追悼論文集 英語学の視点』九州大学出版会, pp.307-318
- 熊本 千明 (1992) 「日・英語のコピュラ文に関する一考察」『佐賀大学英文学研究』17, pp.49-67

- 坂原 茂 (1990) 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」『認知科学の発展』第3巻, 講談社, pp.29-66
- 佐治 圭三 (1973) 「題述文と存現文—主語・主格・主題・叙述(部)などに関して—」『大阪外国語大学学報』29, pp.111-121
- 重見 一行 (1992) 「「は」文の情報的性格をめぐって」『国語国文』61:11, pp.19-38
- 柴谷 方良 (1990) 「助詞の意味と機能について—「は」と「が」を中心に」『国広哲弥教授還暦退官記念論文集 文法と意味の間』くろしお出版
- 新屋 映子 (1994) 「意味構造から見た平叙文分類の試み」『東京外国語大学日本語学科年報』15, pp.1-15
- 砂川 有里子 (1996a) 「日本語コピュラ文の類型と機能—記述文と同定文—」『小泉保教授古稀記念論文集 言語探求の領域』大学書林, pp.261-273
- 砂川 有里子 (1996b) 「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理—「AがBだ」と「AのがBだ」構文をめぐって—」『文芸言語研究 言語篇』30, 筑波大学文芸言語学系, pp.53-71
- 高橋 美奈子 (1997) 「措定文の一面—主格助詞ががでマークされる措定文について」(国語学会春季大会発表要旨集)
- 西山 佑司 (1985) 「措定文, 指定文, 同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第17号, pp.135-165
- 西山 佑司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」『国広哲弥教授還暦退官記念論文集 文法と意味の間』pp.133-148
- 西山 佑司・上林 洋二 (1985) 「談話文法は可能か」『明確で論理的な日本語の表現』文部省科学研究費補助金特定研究(1)最終報告, pp.29-52
- 仁田 義雄 (1986) 「現象描写文をめぐって」『日本語学』5:2, pp.56-69
- 丹羽 哲也 (1988) 「有題文と無題文, 現象(描写)文, 助詞「が」の問題(上・下)」『国語国文』57:6,7 pp.41-58, pp.29-49
- 野田 尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, pp.1-35
- 野田 尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版, pp.17-37
- 松下 大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』中文館書店(1974復刊, 勉誠社)
- 松村 明 (1942) 『現代日本語の研究』国語学振興会編, 白水社
- 堀口 和吉 (1995) 『「～は～」のはなし』ひつじ書房
- 三尾 砂 (1948) 『国語法文章論』三省堂, pp.58-108
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院(1972復刊, くろしお出版, pp.40-50, pp.73-154)
- 宮地 裕 (1984) 「主語・主題・提示語・総主語」『研究資料日本文法⑧ 構文編』明治書院 pp.159-191
- 吉本 啓 (1982) 「「は」と「が」—それぞれの機能するレベルの違いに注目して—」『言語研究』81, pp.1-17
- 吉本 啓 (1993) 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」『言語研究』103, pp.141-166
- W.L.チェイフ(青木晴夫訳)(1974)『意味と言語構造』大修館書店(原著: Meaning and Structure of Language, The University of Chicago Press. 1973)
- FUKUDA, Kazuo. (1995) "Theme/Rheme, Given/New and Japanese Wa." *Studies in Humanities* No.89, pp.105-128. Niigata University
- LAMBRECHT, Kund. (1994) *Information, structure and sentence form*. Cambridge

University Press.

(原稿受理日：1998年1月9日)

天野 みどり (あまの みどり)

和光大学人文学部 195-0071 町田市金井町2160

An analysis of functions of the particles *Wa* and *Ga* using the concept of “presupposition/focus”

AMANO Midori
The University of Wako

Keywords

presupposition, focus, noun-predicate sentence, topic, *Wa* and *Ga*

The function of the particle *Wa* and *Ga* in Japanese are normally explained using concepts such as “old information/new information” and “known/unknown”. In this paper, I will explain their functions using the concept of “presupposition/focus”.

In a noun-predicate sentence with *Ga*, the function of the particle *Ga* has usually been explained as that of an “exhaustive listing” or “focus marker”.

However, the analysis of actual language data show many examples of “presupposition/focus” structures in *Ga* noun-predicate sentences. These are:

Type 1: The focus is on the element in front of *Ga*.

Type 2: The focus is on the element behind *Ga*.

Type 3: The focus is on the whole sentence.

I assert that it is not appropriate to explain that *Ga* as a focus marker because various types of *Ga* noun-predicate sentences exist.

Furthermore, *Wa* marks a topic, whereas *Ga* does not. Therefore, *Wa* sentences have the following meaning: (The topic and presupposition of the sentence can be understood from the sentence alone without relying on the preceding context or the situation.) On the other hand, *Ga* sentences convey the following message: (Interpret the topic and presupposition of the sentence by relying on the preceding context and the situation.)

The focus does not fall only on the element in front of the particle *Ga*. It may be on the element in front of the particle *O* or *Ni*. It may also fall on an adverbial element. Furthermore, it might exist as part of a predicate or a whole sentence. In Japanese, *Ga* is not the only particle that functions specifically as a focus marker.